

著者：新井宏（あらい ひろし）

書名：『理系の視点からみた「考古学」の論争点』大和書房

定価3000円＋税

著者紹介：1937年東京都生まれ。1960年東京工業大学物理卒。日本金属工業常務取締役を経て、現在、韓国国立慶尚大学招聘教授（2001～）工学博士。専門は金属考古学・古代計量史。

著書：『まぼろしの古代尺』（吉川弘文館）『金属を通じて歴史を見る』（「バウンダリー」長期連載）

本書には、「三角縁神獣鏡は魏鏡か？国産鏡か？」という考古学界で長いあいだ論議されてきた問題が、理系の金属考古学者による鉛産地の研究論文によって、すでに「国産鏡」という学問的な決着がついているという。考古学・古代史界の通説をひっくりがえす衝撃的、画期的な内容がいっぱいある。

この本の著者・新井宏氏の研究によって、青銅器の生産地（青銅器にふくむ鉛の産地）を同定する真の方法が是正されたわけだから、この金属学・冶金学上の成果は、世界レベルの科学研究なのである。しかし、氏の論文が発表されてから八年たち、本書が出てすでに八ヶ月になろうとしているが、「魏鏡論」者からは一言の反論もない。それだけではなく三角縁神獣鏡鏡の製作地をめぐる論争で、つねに多数派（魏鏡説）に軍配をあげてきたマスコミはいま、学会誌に発表した新井論文（注1）の学問的な衝撃性にすら気づかない（ふりをしている）のか、高松塚古墳の破壊報道にあらわれたように、学問的な結論の真偽を学会リーダーや文化庁スジの顔色を伺いながら報道する、かなり重い体制追従症に陥っているようなのだ。学界が少数派の問題提起を黙殺し、マスコミが文化庁スジにおもねって学会多数派に同調していった旧石器捏造の図式が少しも変わっていないのかとも思う。

著者の論点は、三角縁神獣鏡鏡の問題だけではない。弥生時代は500年溯るのか？古墳はどんなモノサシで造られたか？弥生時代には製鉄は行われなかったのか？などなど、いま続いている考古・歴史分野の論争にも、著者の具体的な分析数値を根拠にした論証によって、万人が納得できる科学的な結論をしめしている。著者の基礎データにもとづく説得力にみちた研究方法は、さきの捏造事件で表面化した日本の考古学界が失ないかけている科学性をとりもどす方向を具体的に提示していると感じた。

銅鏡以外の感想は別に書くことにし、この欄では、私もかかわった三角縁神獣鏡や前期旧石器遺跡をめぐる考古学界の論争とを関連させながら、人文系の考古学が理系の諸科学とどのようにかかわってきたのか、二、三書きたい。

三角縁神獣鏡の魏鏡論者は、この鏡が中国から一面も出ないことを「特鑄鏡だから出ない」と言い続けてきた。つまり卑弥呼に下賜するために特別に鑄造した鏡だから、中国で出土しないというのである。その場合、本来は「特鑄」の事実を考古学でどう立証するかが課

題になるはずだが、実はそうではない。多数派の考古学者からは「中国で一枚も出ないのが特鑄の証拠なのだ」という、屁（へ）理屈のような「循環論」的な答えしか返ってこない。卑弥呼が魏に遣使したという三世紀前葉の中国で、後漢代になかった新様式の神獸鏡が倭国への贈呈用として500枚以上も大量に「特鑄」された、という主張だ。それなら、それはそれでいい。「特鑄」説は一つの仮説である。その仮説は、考古学の研究課題そのものであり、倭国の古墳から出る鏡がいつ、どこで、どんな原料やどんな鑄型を使って製作されたかが、科学的に研究されるべきでなのだから。

魏にない「景初四年」銘（注2）の盤龍鏡が1986年に出たとき、特鑄鏡論者の屁理屈はほぼ頂点に達したようである。都出比呂志氏（大阪大学教授）は「年賀状」説を出し、マスコミはそれを大々的に報じた。都出説は、「景初四年という年号はたしかに魏にないが、特鑄鏡は年賀状とおなじように、出す前の年の年号を書きこんで、前の年に量産したのだ」といった趣旨である。この年（86年）東北歴史資料館の発表にも、13万年前の馬場壇A遺跡の石器からナウマン象とオオツノジカの脂肪酸が検出されたという発表があつて、マスコミを賑わせた。日本の考古学界には、そんな古い石器に付着した動物の脂が検出されるという研究には、素人とおなじように無知であつた。すでにこのころから旧石器の捏造を始めていた東北歴史資料館の考古学者にとっては、それが国立大学の科学者によって検出された科学的な分析値であるということだけがマスコミをうごかすニュース種だつた。鏡の特鑄鏡論者が選択した三角縁神獸鏡の鉛同位体比の研究（青銅器の鉛産地の研究）も同様で、その研究は「特鑄」説を支持する科学者や国立研究機関（注3）によって独占的に研究されてきており、彼らが分析に用いた中国の鉛鉱山で検出した鉛の同位体比などその基礎データが公表されることは皆無であつた。鏡の特鑄鏡論者にとっては、旧石器と同様に、その分析値が国立研究機関の科学者によって検出された科学的な分析値であるということだけが、自説に有利な方向にマスコミをうごかすことができる価値あるニュース種だつたのだ。

三角縁神獸鏡が「特鑄鏡」であるという主張を学会の軌道に載せたのは、都出氏や田中琢氏（奈良文化財研究所・文化庁遺跡調査官）ら90年代の考古学界を代表する人々であつた。その主張は、小林行雄氏（京都大学教授）の先駆的な三角縁神獸鏡魏鏡説を補完する学会の正論のように新聞や本に書かれていたのを、私は忘れない。いままで学問に値しない、科学研究にも値しない、諸外国の考古学界にも通用しない「特鑄鏡」などといふ似非（えせ）理論が世間にまかり通つていたのは、それがまかり通るような社会的条件が日本の考古学界にあつたからで、それが考古学の真理だつたから支持されていたわけでは決してない。文化庁・文部科学省・国立歴史民俗資料館・奈良国立文化財研究所（奈文研）の傘下にある埋蔵文化財業界の多数をしめる行政研究者（全国の都道府県地方自治体の発掘調査をしている教育委員会職員）の多数がその文化財行政の指導に従っているだけにすぎないのである。日本考古学協会の会員の九割以上を占めている行政研究者は公務員という身分なので相互に繋がっており。特鑄説を主張してきた都出氏や田中氏は、国立大学や文化庁と

いう公務員組織における行政研究者の最上級の上司にあたっている。埋蔵文化財業界＝日本考古学協会という関係のもとで文化庁の埋蔵文化財課の行政指導に反対が出ないのは当たり前のことといえよう。

著者は、三角縁神獣鏡の製作地論争について、「昭和三十二(1957)年、小林行雄氏が「景初三年」「正始元年」の紀年鏡を根拠に、三角縁神獣鏡鏡こそ、卑弥呼に下賜された鏡だとし、同範鏡の分有関係から、大和を邪馬台国とする壮大な古代国家像を示し始めたことにはじまる。一方、三角縁神獣鏡鏡の非魏鏡説は昭和三十七(1962)年に、森浩一氏の「中国から一枚も出ていない」ことが主な論拠であったが、続いて松本清張氏、古田武彦氏も銘文の乱れなどから非魏鏡説を展開、その結果を受けて、昭和五十六(1981)年、奥野正男氏が三角縁神獣鏡鏡には笠松紋という非中国的な文様があることなど型式学的に見ても国産鏡が大部分であると主張した。ただし、これらの問題提起は、学会の主流から全く顧みられることはなかった」と同書(21ページ)で書いている。

ついで、「状況が変わったのは昭和58(1982)年に中国の有力な考古学者王仲殊氏が、中国呉の渡来工人による日本産説を発表した頃からである。論拠は三角縁神獣鏡鏡の源流になっている神獣鏡や画像鏡は江南の呉の領域で発達したものであり、華北の鏡には類似鏡が見当たらないということであった。王仲殊氏にたずねる魏鏡説の反論で、新しい見地をくわえたのは、福永伸也氏の長方形の鈕孔論である。

それは三角縁神獣鏡鏡の多くが倭鏡や仿製鏡には少ない長方形の鈕孔を持っており、そのような鈕孔を持つ鏡は、魏の東北部の勢力圏すなわち渤海湾沿岸地域でのみ発見されていることから、福永氏は『公孫氏の勢力下で銅鏡製作を行っていた工人集団が、公孫氏滅亡後、魏によって再編成され、卑弥呼下賜用の鏡製作に当たった』可能性を指摘した。

ここでひとこと、拙著『邪馬台国の鏡』のことにふれるが、この本は三角縁神獣鏡鏡の国産を論じたものではあるが、この当時、三角縁神獣鏡鏡が全部で何面あるのかということすら一般には公開されていなかったもので、その出土地名表(375面)なども初めて公表した本であった。学界で大きな話題になった王論文よりも一年前に出ているのだが、学界からは完全に黙殺されたような状態だった。また福永氏が魏鏡説の根拠に探し出した長方形鈕孔の中国鏡の出現率は、おそらく1/10000をうわまわるであろう。これに対し日本の三角縁神獣鏡鏡における長方形鈕孔の出現率は完全な100パーセントである。

80年代はじめ、東京国立文化財研究所の馬淵久夫氏らは、国、地方の考古学機関から前漢鏡、弥生時代の細型銅剣、銅鐸、小型?製鏡、三角縁神獣鏡などの文化財を提供させ、高精度の質量分析器を用いて青銅器の鉛同位体比を分析した。馬淵氏らが独自に作った華北、華南、日本、朝鮮半島など鉛鉱山のある4地区の領域図に、前記の同位体比を分析した遺物を分類した。その結果は、前漢鏡や弥生時代の銅鐸や?製鏡が華北の鉛の領域に、後漢・三国鏡とされている古墳出土の三角縁神獣鏡鏡が華南の鉛の領域に、細型銅剣や前期の銅鐸などが朝鮮半島の鉛の領域に、それぞれ整然と入ることが判ったという。それでは中国で出土している三国時代の神獣鏡、つまり真の中国鏡はどの鉛の領域に入るのか。それが

「三角縁神獣鏡は魏鏡か？国産鏡か？」に決着をつける最大の論点である。ところが、馬淵氏は、中国で出土した三国時代の神獣鏡、つまり真の中国鏡は一枚も分析をしていなかったのだ。三角縁神獣鏡は中国鏡という、考古学多数派の結論をそのまま受け入れ、中国出土鏡は分析する必要がないと判断したのか。この馬淵論文（注4）は昭和57年（1982）に出ているから、分析値のもっとも重要な数値がすりかえられたまま、新井氏が①論文を発表した2000年まで、18年間ものあいだ、特鑄説は冶金学的にも証明されてきたかのように喧伝されていたわけである。また、鉛をだす鉱山の領域が馬淵氏のように整然と分けられないことは、当時すでに日本の神岡鉱山の例（中国の鉛同位体比に近い）から指摘されていたが、そのことも2000年に新井氏が始めて指摘するまで黙殺されたまま論じられなかった。

要するに、東京国立文化財研究所の鉛同位体比の研究によると、三角縁神獣鏡の鉛同位体比は全部、中国産の数値をしめす華南産の領域にはいることが繰り返し発表され、学会だけではなく、マスコミや他領域の学会・研究者にも、三角縁神獣鏡の特鑄説が金属学・冶金学会の科学的分析によって裏づけられていると信じられていたのである。馬淵氏らは18年間ものあいだなぜ基礎資料を公開しなかったのか、謎に満ちているが、ここから先は、読者の楽しみに書かないでおこうと思う。

最後にひとこと、旧石器時代の考古学の研究には、地質、地層の年代を明らかにする火山灰の研究が応用され、大きな成果を生み出した。また石器の使用痕をさぐる研究には、高倍率の金属顕微鏡が活用された。しかし、旧石器捏造事件では、その理系の研究成果はすべて、捏造石器を本物にみせかけ、ふるい時代に見せかける、考古学者が人をあざむき、世間をだます手段として悪用されたのであった。

注1：新井宏論文

①「鉛同位体比による青銅器の鉛産地推定をめぐる」『考古学雑誌』八十五巻二号（二〇〇〇）

②「三角縁神獣鏡・泉屋博の分析方法は重大な誤り」『季刊邪馬台国』八十七号（二〇〇〇五・四）

③「鉛同位体比からみた三角縁神獣鏡の製作地」『情報考古学』十一巻一号（二〇〇五）

④「鉛同位体比からみて三角縁神獣鏡は非魏鏡」『東アジアの古代文化』（二〇〇六・秋）

注2：魏の明帝の「景初」年号は三年まで。翌年一月一日に明帝が崩去したため、その月を景初「後十二月」とし二月から「正始」年号に変わる。

注3：東京国立文化財研究所

注4：馬淵久夫・平尾良光「鉛同位体比による漢式鏡の研究」1982年1月『MUSEUM』